

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

黒田 禎一郎

2020年9月20日（日）

主 題：「新しい人生観に生きる」

—良いサーバント—

テキスト：1 ペテロの手紙2章18—23節

はじめに

- 聖書を読んでいくときに、大切なことの1つに、文脈的理解があります。たとえば、2章18節のはじめに「**しもべたちよ**」という呼びかけがあります。他の翻訳聖書を開きますと、「奴隷たち」、「召し使いたち」となっていますがしかし原語は、「奴隷」という言葉があります。
- 皆さん。一般的に私たちが「奴隷」という単語を耳にしますと、鎖につながれ、鞭で追い立てながら肉体労働をする人たちと思うかもしれませんが、しかし、ここで訳されている単語は、そういう人たちではありませんでした。
- 彼らの中には、ローマの貴族の子どもの家庭教師をするような、教養ある奴隷もいました。また王室の財産管理を任せられたほど、才能がある奴隷もいました。今でいう「ハウスヘルパー」です。
- 新約聖書の時代、ギリシャ・ローマの世界にはそのような奴隷たちが多くいました。なんと、人口の半分以上は奴隷で、その数約6千万人と言われています。ですから鎖に繋がれた奴隷ではなく、むしろ主人の家で働く「ハウスヘルパー」という意味で理解してください。しかし、奴隷は奴隷です。つまり主人に雇われて、自由がない人でした。ですから奴隷は主人の所有物でありました。こういうことを理解することが文脈的解釈であります。
- ペテロは、迫害の危険にさらされている小アジアのクリスチャンたちに、この書簡を書きました（1：1）彼は、キリスト者は世にあって旅人、寄留者にすぎないものですから、神（主人）の奴隷（しもべ）であることを意識するように勧めたのです。
- 2章11～17節は一般のキリスト者に対する勧めです。そしてこの18節から25節は、地主や資産家に仕えていた奴隷たちに対しての勧めです。世の中では、主人対奴隷のような差別があっても、神の前では一切の差別はありません。**ガラテヤ人への手紙3章**
3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。
- ところで私たちも生きていく上で、様々な困難に出会います。とくに、職場において上司や同僚や後輩など、多くの人たちと一緒に働くときに、私たちはどのような心構えで働くべきかを、ここで学ぶことができます。 2点

大切なポイント

1. **敬意を込めて主人に従いなさい**

2:18 しもべたちよ、敬意を込めて主人に従いなさい。善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。

- ペテロはここで、クリスチャンになった奴隷（しもべ）が、主人に対して横暴な態度をとったり、無視したりしないように勧めました。福音によって自由な者とされ、教会でも平等に扱われるからといって、横暴な態度をとってはいけないと論じているのです。
- 皆さん！ 善良で優しい主人に従うことは、それほど難しいことではないでしょう。しかし、当時意地悪な主人もいたようでした。意地悪されたら、当然怒りが湧いてくるでしょう。人間として自然反応ではないでしょうか。
- それなのに、なぜ、ペテロは意地悪な主人にも従うように、と勧めたのでしょうか。その答えは次にあります。

2:19 もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。

2:20 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。

- ここで注目したい点は、「神に喜ばれる」という言葉です。別訳では「神の恵みなのです」とあります。21節には、

2:21 このためにこそ、あなたがたは召されました。とあります。

- 実は、使徒パウロも同じようなことを語っています。ピリピ1章

1:29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。

- ここで少し整理してみましよう。ペテロはこのように述べました。

キリストのために苦しむこと ⇒ 神に喜ばれること (神の恵み) ⇒
そのために召された。考えてみると、変な構図ではないでしょうか。

苦しむことは神に喜ばれ、そのために召された、とは信じるのが難しいことです。

- 私たちも善良で優しい主人のもとでは、まあ大丈夫でしょう。しかし意地悪な主人にも従いなさい。それはキリストのためです、と言われて、果たして従順でいられるでしょうか。
- 少し考えてみると、世の中は、苦勞すること、大変なことを避けて、楽な生き方を求めるものです。私たちもそんな時代の雰囲気、社会の雰囲気の影響を、いつの間にか受けてしまっているかもしれませんね。少しでも苦勞せずに、楽をしたいというものです。しかし、苦勞には意味があります。

- 皆さん。どうして、神は私たちが不当な苦しみに、耐え忍ぶことを喜ばれるのでしょうか。どうして、キリストのために受ける苦しみが、神の恵み、神に喜ばれることでしょうか。世の中の論理とは真反対なことではありませんか。そうです。世の中の原理と全く違うことを、神は喜ばれるのです。

- それこそ、世に打ち勝つ幸いな原理をキリストのうちに見出すものであると言います。ここにキリスト信仰の奥義が秘められています。
- すなわちここで教えられることは、神が置かれた所で、敬意を込めて主人に従いなさい、ということです。それは神に喜ばれること、神の恵みであるからです。その理由は、次のポイントです。

2. 善をもって悪に報いなさい

- 私たちは、不当な苦しみを受け、悲しみに耐えることは、主が喜ばれることであると聞きました。どうも消極的で、心が沈んでしまうのではありませんか。しかし、そうではありません。
- ここに神様を知らない人たちの考え方とは異なる人生観、まったく新しい世界観があります。善をもって悪に報いるには、どうすれば良いでしょうか。大切なことを3点上げてみましょう。

1) 神の前に生きる

2:19 もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。

- ここに「不当な苦しみ」とありますが、その前に「もし」という言葉がありますね。当時の常識からすれば、奴隷がどんなに苦しみにあおうとも、それは「不当な苦しみ」ではなかったはずで、奴隷が苦しみにあうとしても、それは「正当」な苦しみでした。
- 当時、主人がすることはすべて正義でしたから、そこには不正や不当といった概念が入り込む余地はありませんでした。奴隷の身とはそんなものでした。しかし「もし」そのようなこと（あり得ないこと）が起こっても、「神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。」(2:19)、とペテロは述べました。
- 「良心のゆえに」とは、自分に正直にということです。つまり、あり得ないこと、想定外のような「不当な苦しみ」を受けても、神の御前で正直に生きることです。神は私たちに良心を与えてくださいました。良心は本来、人が人として正しく生きるために必要なものです。
- ですから聖書は、「神の御前における良心のゆえに」と教えています。しかし我慢ではなく、苦しみの奥にあるものに目を留めていなければ、できないことです。

2) 善をもって悪に勝つ

2:19 もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。

- ここで述べられていることは、善をもって悪に勝つという積極的な倫理です。恨んでも、逆らっても事態は良くなりません。仕返しをすれば、報復の連鎖が始まります。そこで2倍、3倍、10倍返しという事態になりかねません。世の中、どれほど多くの人々がこの悲劇の中で苦しんでいることでしょうか。
- ここで大切なことは、神はすべてをご存じであることです。すべての者をさばかれる神が、ふさわしい形で働かれることを祈りつつ、自分は善を行うことです。
- ここで、どうぞ誤解しないでください。前にも学びましたように、私たちが不当なことを要求されたとき、一切逆らってはならないとか、抗議してはいけないということではありません。聖書は、そのようには教えていません。
- 私たちには社会の正義を求める必要があります。しかし個人的に恨みを抱いたり、仕返し（復讐）しようとしたりしてはならない、ということです。むしろ、善をもって悪に勝つ、ということです。それには、
 - ① 神の前における良心が正しく働かなければできません。そして
 - ② 苦しみの奥にあるものをしっかりと握っていないと、できないことです。

- ・では、善をもって悪に報いるには、どうすれば良いでしょうか。

3) イエス・キリストの模範にならう

2:21 キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。

- ・神ご自身が人となられ、「このように生きなさい」と模範を示されました。万物の創造神が、へりくだり、十字架の死にまでも従われました。
- ・主は、ご自分を十字架の苦しみに合わせた人々をのろったり、仕返ししたりはされませんでした。そのように私たちに模範を残されました。
- ・その主キリスト・イエスが、私たちの人生を変えてくださいました。そして、この争いに満ちた世界も変えてくださいます。ですから、模範となる主キリストの足跡に従うことが大切です。では、キリストはどのような態度を取られたのでしょうか。

① キリストも不当な苦しみにあわれた。

2:21 キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。

- ・キリストは自ら痛み、苦しみを経験されました。ですから、私たちの痛み、苦しみを同じように理解してくださるお方です。痛み、苦しみを理解してくださるとは、なんと幸いなことでしょうか。イエス様はまことの癒し主であります。さらに、イエス様を詳しく見てみましょう。主はどのような態度を取られたのでしょうか

② キリストは仕返しをなされなかった

- ・天の軍勢を呼ぶこともできたお方が、一つも仕返しをされませんでした。イエス様がお生まれになられたとき、次のようなことが起こりました。

ルカ福音書 2章

2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

- ・そればかりか、自分を十字架につけた者たちのために祈られました。

ルカ福音書

23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」ルカ

- ・どうしてキリストは、仕返しをしなかったのでしょうか。
 - (1) 正義のさばき主である天父神に全幅の信頼をおいていた
 - (2) この世の論理ではなく、神の国の論理に委ねられた

③ キリストは全き信頼を寄せられた

2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。

- ・キリストは正しいさばきをされるお方に、自分を委ねられました。これがキリスト信仰です。私たちは神の家に住む「しもべ」です。「しもべ」として、私たちはどのように歩むべきでしょうか。

- ・私の内には、善を行う力はないことを知っています。しかし、聖書は神の家に仕える「しもべ」として、主人である神を信頼して歩むこと教えています。仕返し、復讐など、世の悪い連鎖のうちは歩むではありません。世に打ち勝った世に打ち勝っていく、良い連鎖のうちは歩むことです。
- ・ですからイエス・キリスト様の後に、私たちはお従いする「しもべ」でありつづけることが大切です。その人は「新しい人生観に生きる」人となります。

ま と め

主 題：「新しい人生観に生きる」

—良いサーバント—

- ・今日は、「善をもって悪に報いる」神のしもべの生き方について学びました。
正直言って、私の内には神のしもべとして生きる力は持ち合わせていません。では、どう歩めば良いでしょうか。
 1. 神の前で良心を働かせて生きる
 2. イエス・キリストの模範にならう
- ・人生のまことの勝利者は、善をもって悪に報いる人です。私たちは神の家の「しもべ」として、主人であるイエス・キリスト様にならい、良心を正しく働かせて歩もうではありませんか。

* God bless you !